

事例 6

タイトル： 認知症の理解促進と認知症症状進行の受容に関する支援

・ <事例の状況>

およそ8年前アルツハイマー型認知症と診断され、その間在宅介護の期間を経て、今年、施設入居となった70代後半男性Aさんの事例。認知機能の低下が見られるが、日常生活動作に支障はない。家族の面会は月に数回あるが、妻は面会に来ても「本当は会って話したいけど、帰りたいといって私に付いてくる姿を見たくない・・・」「私に会ったら帰りたくなくて主人が辛い思いをするのではないか・・・」と言って、施設の玄関先で帰ってしまったたり、直接会うことは避け、涙を浮かべながら遠くからAさんの姿を見つめていることがある。しかし、Aさんは妻と会うと非常に嬉しそうな表情を見せ、家族との時間を楽しみにしている様子も伺われる。本事例は、妻に対し認知症の理解を促し、夫の認知症症状の進行に対する受容を促進することで、夫婦互いの想い（一緒に時間を過ごしたい）の実現に向けた計画を立案するものである。

【この事例で課題と感じている点】

面会に来る妻と穏やかな時間を過ごすための支援

妻の認知症に対する理解の促進

帰宅願望（帰りたいという想いの訴え）への適切な対応

妻への精神的なサポート（認知症症状の進行に対する受容のサポート）

職種間の連携

・ <キーワード>

家族に対する認知症理解の促進。 家族支援。 職種間の連携。 障害の受容。

・ <事例概要>

【年齢】 70代後半

【性別】 男性

【職歴】 自営業

【家族構成】 同居：妻 子供とは別居

【認知機能】 HDS - R 8点

【要介護状態区分】 要介護度

【認知症高齢者の日常生活自立度】 b

【既往歴】 高脂血症 生活習慣病

【現病】 アルツハイマー型認知症 便秘症

【服用薬】 アリセプト、メバリッチ、ガスモチン、酸化マグネシウム、フォルセニッド

【コミュニケーション能力】 会話により意思疎通を図るのは難しいが、非常に丁寧な言葉づかいで接する。時折厳しい表情を浮かべ介助を拒否することもあるが、日常の多くはにこやかな表情で過ごす。

【性格・気質】 自分が望む生活様式や訴えは曲げない。時折、語気を荒くする場面も見られ

るが、関わりの中で冗談を交える事もある。

【ADL】 食事：自立 排泄：一部介助 入浴：一部介助 歩行：自立 視力聴力：支障無し

【障害老人自立度】 A1

【生きがい・趣味】 タオルをたたむ事やTVの演芸番組を見る事が日課となっている。また、外出時には表情も良く景色について話す事が多い。

【生活歴】 出生地の小学校、大学を卒業後自営業に就く。その後結婚、2人の子供をもうける。仕事一筋ではあるが、旅行も好き。親しい友人は少なかった。

施設入居10数年前より理解力の低下が見られ、周囲とうまくコミュニケーションがとれず苛立つ様子が見られ始め、施設入居8年前から妻との会話が成り立たなくなり、認知症の診断を受ける。日常生活動作に支障は無いものの同居の妻にとっては、意思疎通が図れないことが大きな負担となり短期入所を利用するようになる。その後、認知症の進行により在宅での介護が困難となり、施設入居となる。

【人間関係】 男性の入居者を中心に会話を交わす事はあるが、相手の言動に対しての相槌や天気の話が主である。他入居者とスタッフの区別はついておらず、「共同生活所」の感覚で過ごしている様子である。行動や心理症状の顕著な女性入居者に対して、叱責する場面も見られる。

【本人の意向】 日中は自室ベッドで横になったり、リビングでTVを見ていたりすることが多く、周囲との関わりを積極的にもたない様子が伺われる。また、昔から対人関係を多く持つ性格ではないことから、落ち着いて一人の時間を過ごせる場所が大切だと考える。更に、外を見ながら、「いい天気だね。」と話す他、外出時には穏やかな表情を見せる事が多いため、外出の機会を設けたり、季節を感じられる空間作りが大切だと思われる。家族の面会時には非常に穏やかな表情を浮かべ、嬉しそうに接していることから、家族との関わりを大切にしたいと考える。

【事例の発生場所】 施設。家族の面会時に帰宅の訴えが見られる。帰宅願望を訴える夫の姿を見るのが辛いと話す妻は、面会に来て泣きながら夫の姿を眺めているだけで、会うことを拒むことがある。結果として、家族の面会の頻度が低くなる。せっかく来て玄関先で帰ってしまう。短時間で面会を済ませてしまう事等が見られている。

短時間で面会を済ませてしまった場合などは、家族の帰宅後、不穏の表情や不安・寂しげな表情を見せる事がある。